文春文庫

雪のチングルマ

新田次郎

文藝春秋

文春文庫

320円

雪のチングルマ　112—16

1979年2月25日　第1刷

著　者　新田次郎
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

雪のチングルマ

新田次郎

目次

雪のチングルマ……7
羽毛服……71
コブシの花咲く頃……113
春富士遭難……149
赤い徽章……189
真夜中の太陽……243
解説　近藤信行……295

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〈初出誌一覧〉

雪のチングルマ　別冊文藝春秋昭和47年秋季号

羽毛服　小説サンデー毎日昭和48年2月号
（「赤い羽毛服」改題）

コブシの花咲く頃　オール讀物昭和47年3月号
（「雪が解けるまで」改題）

春富士遭難　小説新潮昭和47年7月号
（「非情！　春富士遭難」改題）

赤い徽章　小説サンデー毎日昭和46年7月号

真夜中の太陽　オール讀物昭和48年12月号
（「アラスカ霧譚　真夜中の太陽」改題）

☆右作品は昭和49年4月文藝春秋より刊行の短篇集「雪のチングルマ」に収録。

雪のチングルマ

1

沢渡からは白い雪の道が真直ぐ一本、前に延びている。踏み跡がないのは、数日前に雪が降って以後誰も通っていないからである。

五人の男たちはそれぞれ大きな荷物を背負っていた。雪の深さはようやく膝に達するぐらいだったが、雪道に入ると速度は急に落ちた。隊列はしばしば停止し、その度に順序が替った。先頭に立つ者ほど雪踏で苦労しなければならないからである。隊列の順序を替えるように指示するのは最後にいるリーダーの飯田庄平だった。

湯谷信一は四番目を歩いていた。キスリング型のルックザックにつめこんだ荷物はかなり重かったが、その歩調が変らぬかぎりはどうやら従いて行けそうだった。山に来たら、そして荷物を背負ったら、なにも考えず、なにも云わず、よそ見はいっさいせず、足もとだけを見詰めて歩か

ねばならないと、夏山合宿のときリーダーの飯田にいわれていたことは冬山においても同じことで、いよいよ行動に移ってからは前を行く人の足跡を追う以外にすることはなかった。山を歩くこつは調子を乱さぬことだ。一歩一歩がリズミカルに繰返されている限り、疲労は来ないと教えられていても、なにかの拍子に足を滑らせたり、背の荷物をゆすり上げたりするようなことがあると、リーダーの飯田が云っているリズムが乱れてしまって、それを取返すまでには一苦労した。だが、やがて、前のようなリズムに乗ってしまうと、耳に聞こえて来るものは、雪を踏む足音だけで、見るものは、前の人が踏みかためた白い雪道だけになる。その雪の踏み跡も深かったり、浅かったり、山側によったり、梓川に寄り過ぎたりの多様の変化があって、結構眼を楽しませていた。

夏山合宿のときは、登山者とすれ違うときに、待ったり、待たれたりで、歩調は乱されっぱなしだったが、冬山は、彼等のパーティー以外は誰もいないから、その雪の一本道が続くかぎりは他人によってペースを乱される心配はなかった。

リーダーの飯田はなにも考えないで歩けというのだが、足が、五人のパーティーの持つ固有のリズムに乗ってしまうと、湯谷の心には、つい余裕が出て来て、松本駅で食べた蕎麦がうまかったことや、それと対照して大学の食堂の蕎麦がうまくないのは値段が安いからばかりではなさそうだなどと考えてみたり、冬山へ行くと云っただけで死に別れるような悲しい顔をした母のことなどを思い出すのである。

「ようし、ストップ。一本立てよう」

リーダーが云った。一本立てようとは、煙草を一本吸うだけの休憩時間を取ろうという山言葉である。もともとはボッカ（歩荷。大きな荷物を背負って歩く人のこと。うしろから見ると荷が歩いているように見えることから出たもの）たちが使う言葉だったのが一般化されて、今ではごく普通の山言葉になっていた。

湯谷はこの言葉を夏山合宿に新人としてはじめて参加したときに覚えた。そのころは、新人が二十人もいたが、その後の山行のたびに脱落して今は半分に減った。今回の冬山山行には三名の新人が申し込んでいたが、出発の直前に二人の新人が、病気を理由にことわって来たので、五人の隊員中、新人は湯谷一人となった。しかし、湯谷は新人が彼一人であるということに、いまのところは何等こだわってはいなかった。

湯谷は荷物を背負ったまま雪の中にひっくりかえり、荷物と自分の体重で、ふわりと雪の中に沈んで行きながらそこに拡がる大空を見詰める。冬山の空はこんなにも澄んで美しいものかと、雪眼鏡（ゴッグル）を透して見上げる高い高い空の青みの中に毛筋ほどの雲を見つけて、その雲の行方を眼で追っていると、

「湯谷、ルックザックから肩をはずして、自分で自分の肩を叩け」

と飯田に云われて、湯谷は、ああそうだ冬山に来ているのだなと自分自身の存在に気がつくほど、彼は山の中にのめりこんでいた。

「湯谷、今度はお前がトップをやれ、冬山だって夏山だってトップをやることにおいては同じだぞ。うしろを振り向くようなことなしに、うしろの人たちの歩調に合わせてゆっくり歩くのだ」

しばらく休んでから湯谷はリーダーに云われたとおりトップに立った。

誰も踏んでない新雪に覆われた道が一本彼の前に延びていた。時々野兎が横断した跡があるが、すぐまた無垢な白い雪道になり、そこへ一歩一歩を踏みこんで行く。ラッセルが身にこたえるほどの深さではなかった。新雪の下には根雪があるから、足は根雪の上で止った。ときどき、その根雪に残されている古い足跡に踏みこむと、丁度川を渡っていて深みに踏みこんだように、身体が傾がってしまうことがある。そういうところはちょいちょいある。それがかえって注意力を牽くことにもなる。

湯谷は、間もなくトップとしての安定したリズムを覚えこみ、誰からも文句が出ないように適当な歩調を取るようになった。それがしばらく続くと、ふと自分がトップを歩いていることすら忘れてしまう。雪道からの強い光線の反射がゴッグルを通して彼の眼をまぶしく痛めつけ、自然に眼を細めているうちに、歩いていることすら忘れてしまいそうになった。はっと気付いて、そんなたるんだ気持でいることをうしろの人たちにさとられまいと思った瞬間、彼の口から言葉が洩れた。

おお寒む　こ寒む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山から小僧が飛んで来た
団子の一つもくれてやれ

おおさぶ　こさぶ
山から小僧が泣いて来た
繭玉の一つもくれてやれ

註　信州ではさむいことをさぶいということがある。めえだまはまゆだまが訛ったもの。小正月（旧正月）に柳の枝に繭の形をした餅をさして飾り、その年の養蚕の成功を祈る。その繭の形をした餅のことをめえだまという。

その童歌が湯谷信一の唇をついて何故出たのか湯谷自身もよくわからなかった。とにかくなにか云おうとしていたときふと口を出たのが、祖母から教わったその童歌だった。彼の祖母は、彼が十歳のとき八十二歳で亡くなったが、死ぬまで頭はしっかりしていた。生前、祖母が、その童歌を彼に歌って聞かせるとき、彼女の顔は若返って見えた。故郷を離れて、ずっと東京で生活している晩年の祖母にとっては、彼女が幼いころの思い出にすがることが唯一の生甲斐のようであった。祖母がその童歌を初めて彼に教えたのは何時ごろだったか彼の記憶にはない。おそらく彼

は祖母が口ずさんでいたものをいつの間にか聞きおぼえたのに違いない。

彼が九つか十になったころ、祖母は、その童歌は信濃の子供たちが、雪がちらちら舞い始めるのを見て歌ったものだと彼に教えた。しかし祖母はそのように彼に教えながら、その童歌を、うららかな春の日に突然口にしたり、秋の空を見上げながら口ずさんだりした。

湯谷信一の弟の信二が裸のまま這い廻っているのをつかまえて、この童歌を歌いながら、金太郎の腹掛けをさせている夏の宵のことなど彼はふと思い出すことがある。

祖母がこの童歌を口ずさむときには、祖母特有の抑揚（よくよう）のついた歌い方をした。その歌い方もその時々で少しずつ違っていたようだった。

祖母にとってその童歌は郷愁の歌となっていたようだった。そよりと吹く風の感触で故郷の谷間を思い出したときも、重く垂れ下った冬の雲の中に故郷の空を思い出したときも、彼女はこの童歌を口にしたのである。無意識に彼女の故郷に投げかけることばがそれだった。

だが、湯谷信一はなぜ雪の道を歩きながらその童歌を口にしたのか自分自身でよく分らなかった。或は、ぽかぽかと春のような日和に恵まれた、眠けをもよおすような単調な歩行の中で、気分を立て直そうとした瞬間、ひょいと眼に入った繭玉に似たひとかけらの雪塊から、その童歌を連想したのかもしれない。右側はかなりきつい傾斜面になっていて、その斜面を小さな雪塊がたえず落下していた。もしかすると、冬山というのに、寒さは全く感じない、のどかな風物の中に、祖母の郷愁に似たものを感じ取って、少年時代の、おばあさんっ子になったのかも知れない。

湯谷は、少々きまりが悪かった。行動中に話をすることは禁じられていた。ましてや歌など歌うことはもっての他であった。

彼は、きっとリーダーの飯田にきつく叱られるだろうことを覚悟していた。しかし飯田はなにも云わなかった。他の先輩たちもなんにも云わなかった。そうなると、湯谷が歌った童歌はそこにいる人のすべてに無視されてしまった形になり、それが湯谷の口を出たものの誰にも聞かれず、そのまま消えて行ってしまったあとの空虚さの中に佇立(ちょりつ)しているような気持で歩いていると、いま彼の口をついて出たばかりの童歌が、実際は歌ったのではなく、歌おうとしただけのことのようにも思われて来るのであった。

2

中の湯で大休止があった。橋を渡って中の湯まで行くにはそう時間はかからないし、中の湯には留守番もいた。しかし、そこへ行く必要もないから、彼等は夏道のバスの停留所あたりに荷物をおろした。

「おい湯谷、お前はサブリーダーの中野と荷物を取り替えろ」

リーダーの飯田が湯谷に云った。

「なぜです」

湯谷が訊き返すと、
「お前、足が浮いて困っているようだからな」
それで、どっと湧いた。いかにも楽しそうな笑いだった。やはり、行動中に童歌など歌ったのがいけなかったのだなと湯谷は思った。あのときはなんにも云わないでいて、今になってそのときの責任を取らせようとするリーダーの飯田のやや陰険にも思われるようなやり方に、湯谷は少少口をとがらせただけだった。いやだとことわることもできないし、ことわるほどのことではなかった。中野の荷物と湯谷の荷物の重量には大差がなかった。ただ、中野の荷物はかさばっているので、背負いにくいことは確かだった。
「おい湯谷、お前さっき雪小僧の歌を歌ったろう。見ろよ、天気が変って来たぞ。そろそろ白い小僧のお出ましだ」
飯田はそう云いながら空を指した。空がいつの間にか曇っていた。白い小僧とは雪のことを指していることは明らかだった。すると飯田はあの童歌を知っているのかもしれない。
「たしかに、天気が変って来たようですね、でも白い小僧は……」
「白い小僧が飛んで来たら困ることになるぞ、そうは思わないか」
飯田は低い声で云った。
「いっこうに困りませんね。むしろ、そうあって欲しいと願っているところです。冬山だから少しぐらい雪が降ってもいいでしょう」

「そうだ。ほんとうはそうだよな湯谷、ぽかぽかとあったかい気持じゃあしようがない。しいんと冷えるような山行でなけりゃあためにならないからな、きさまはなかなか心掛けがいい奴だよ」

そして飯田は、あの歌をもう一度歌えと云った。しかし開き直ったように、さあ歌えと云われると、湯谷はかえって歌えなくなった。

「なにがなんでも歌えって云うんじゃあないさ。歌いたくなけりゃあ歌わんでもいい。しかし、既にお前は雪小僧を呼んでしまったのだ。雪小僧はおれたちのすぐそばまで来て、じっと様子を窺っている。どっちみち、小僧は出て来るのだ。そして雪小僧との最初の対面は釜トンネルということになるだろうね」

「釜トンネルでなにがあるっていうんです」

「釜トンネルに雪小僧が現われるんだよ。お前がさっき呼んだ雪小僧が。釜トンネルの入口に待っていて、ぼくのお父さんが釜トンネルの向うで待っているから一緒に連れてってくれって云うんだ。その小僧は素足に藁草履を履いている。夏のシャツ一枚しか着ていないのに寒そうな顔もしないで、ねえ小父さん、ぼくをお父さんのところへ連れてってくれって云うんだ。トンネルに入ると、その小僧の草履の音がべったべったと聞こえる。その草履の音が気になってしようがないから、ふりかえると小僧の姿はない。歩き出すと、草履の音がまたべったべったと従いて来るのだ」

飯田はそこまで話して湯谷の顔色を窺った。
「怪談はそれでおしまいなんですか」
「いやおしまいではない、序の口なんだ。怪談は最後の最後まで続くんだ」
「最後の最後っていうのが分らない」
「つまり、おれたちが死ぬまで続くんだ。それはお前が、あの雪小僧の歌を歌ったからだ」
「あれは信濃の童歌です。雪の降る地方では信濃以外でも歌われている童歌だと聞いています。あの歌をぼくが歌ったから怪談が始まって、それが死につながるなんていうオーバーな表現は、かえって怪談の効果を減殺してしまうものだと思います。昔の怪談ならいざ知らず、現在の怪談はスマートでなければならない……」
「これは驚いた。こんなところで、新人にお説教されるとは思わなかった。じゃあ、ひとりでやってみるか」
「なにを……」
「釜トンネルをひとりで歩いてみろ。いいな」
飯田は怖い眼で湯谷を睨めつけると、
「じゃあ、きっかり二十分経ってから、此処を出発しろ、おれたちは釜トンネルの向う側で待っている」
飯田は他の三人を連れて先行した。湯谷はその先輩たちのうしろ姿を眼で追いながら大学山岳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com